金津と小合

金津、小合両村は四月一日を期して別面の通り本市へ合併、大新津市としてともに新市建設への歩みをふみだすことになつたが、以下は同村の沿革と現状のあらましである。

沿革

小合村は、信濃川の中に散在していた洲が、川筋の変化によつて次第に連接して陸地となつたもので、これは同村一帯が地下数尺に草の根などで出来ている泥質層のためなどが沢山発掘されており、殊に数年前には川根城主海口氏の丸木舟（現在沢海の博物館で保存）が発掘されたことなどからも推されるハッキリわかるのである。

各部落の開発は元亀・天正以後のように云われているが、その年月は詳かではなく、上杉氏が当国を統治した頃は金津の荘と称されて、三条城の城主山吉丹羽宰景長や、そのテ木場城主山吉孫郎兵衛及び護摩堂城主岩島三河守などが相ついで領有していたが、慶長三年に上杉氏が会津に移封されるとともに新発田の領主となつた。

その後は明治に入り、明治二年六月十八日新発田藩が版籍奉還となつて、明治五年に新潟県の管轄に帰し、明治五年に新潟県の第三区に編成替となつて区制ができた。同十二年区制が廃止されて中浦原区に属し、同村を三分して金津、西島、田家の各戸数は属し、同村を三分して金津、西島、田家の各戸数は後場に属したが、後古津戸数後場に統一された。明治二十二年町村制施行の時、田家の一部は新潟市に合せられ、他は津島村に組織してその後場を古津に置いた。二十六年中に中村、鎧島は別に中島村を組織して独立したが、明治三十四年村合併に伴いて金津村と称し、古津瀧ノ沢、金津、塩谷、鵜の頃には、その部落とし、かなり今日の姿になつてきた。慶長年間に会津藩主蒲生郡氏郷が移封された後は、新発田藩主溝口氏の所領となり寛政年間には更に徳川氏の自領となつた。明治元年版籍奉還となつてから、明治五年に新潟県の管轄に帰し、明治十年区制が施行されて、七年更に二十七区の三区に編成替となつて区制ができた。同十二年区制が廃止されて中浦原区に属し、同村を三分して金津、西島、田家の各戸数は後場に統一された。明治二十二年町村制施行の時、田家の一部は新潟市に合せられ、他は津島村に組織してその後場を古津に置いた。二十六年中に中村、鎧島は別に中島村を組織して独立したが、明治三十四年村合併に伴いて金津村と称し、古津瀧ノ沢、金津、塩谷、鵜の頃には、その部落とし、かなり今日の姿になつてきた。慶長年間に会津藩主蒲生郡氏郷が移封された後は、新発田藩主溝口氏の所領となり寛政年間には更に徳川氏の自領となつた。明治元年版籍奉還となつてから、明治五年に新潟県の管轄に帰し、明治十年区制が施行されて、七年更に二十七区の三区に編成替となつて区制ができた。同十二年区制が廃止されて中浦原区に属し、同村を三分して金津、西島、田家の各戸数は後場に統一された。明治二十二年町村制施行の時、田家の一部は新潟市に合せられ、他は津島村に組織してその後場を古津に置いた。二十六年中に中

沿革

金津村は金津、古津、東島、西島の部落名から推して、遠く越後平野がまだ海であつた時代に、すでに部落としてでてきた。が、凡そ鎌倉時代以前のことは、正確な史実を詳かにすることはむずかしい。

源平時代から部落名がたちつと呼んで部落かたちつ奥を詳かにすることはむずかしい。

沿革

金津村は金津、古津、東島、西島の部落名から推して、遠く越後平野がまだ海であつた時代に、すでに部落としてでてきた。が、凡そ鎌倉時代以前のことは、正確な史実を詳かにすることはむずかしい。

源平時代から部落名がたちつと呼んで部落かたちつ奥を詳かにすることはむずかしい。

石油など年産一万二千五百kl

白玉の滝などハイキング好適地

交通に便て多い俸給生活者

白玉の滝（堆）

町、初日、東島、西島、中村、鎧島の十カ大字と、小須戸町並びに信濃川を隔て、今日に至つた。

位置、地勢、交通

同村は東経百三十九・五度、北緯三十七・四三度、新津市の南に接し、東南は山を隔てて新関村、五泉市（旧横田村）に接し、西は小須戸町、西北は小合村に接している。

東南一帯には丘岡が起伏し、西北には平野が展開して田園をなしている。山岳部は東南に国際堂山、高二百四十八メートルの警察等山を最高として北走するに従つて隙次起伏が緩慢となつている。一般に山勢はゆるやかで、松杉などはよく育ち、山地の南東部には石油脈が走り原油を産する。

村の中央部は古津、朝日の接続地域で、ここに村役場（現支所）、小・中学校、保育園、悪霊協同組合、グラウンドなど村の重要機関が殆ど集合している。昭和二十四年以降、四年に信越線古津駅が新設されてからは、この駅までに歩き七百メートル、交通機関として、鉄道信越線が村を貫通し、この線に平行して指定県道、津―加茂線が開け、西部には県道小須戸線、南部には県道小須戸線、南部にて、一共にバスの便があるが、他に村道・県道も殆ど完備して、交通には比較的恵まれている。

人口

総面積一千七百六十二平方粁

耕地

田四百五十七町歩

山林

八百七十町歩

人口

五千三百八十三人

人口男

三千三百八十三人

産業

同村の花卉園芸の歴史は古く明和年代（一七六〇年）に遡る。この頃、小田原の人が花木を栽培してこれを行商し生計をたてたことが始まりであるとも伝え聞いている。その後天保年間の大飢饉で一粒の米もとれず仏花などを栽培、これを米や麦と交換して生命を繋いだ。爾来、保護育成され、明治二十七年頃には紫金山